

生活景の「読み解き」とまち歩きの意義 A study on “reading” of living landscape and meaning of town walking

中島伸¹⁾, 永瀬節治²⁾, 西村幸夫³⁾,

A study on “reading” of the living landscape and meaning of town walking

1) 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻, 博士課程

The Graduate School of Eng., Dept. of Urban Planning, Tokyo Univ.

2) 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻, 博士課程

The Graduate School of Eng., Dept. of Urban Planning, Tokyo Univ.

3) 東京大学大学院工学系研究科都市工学専攻, 教授

Prof., The Graduate School of Eng., Dept. of Urban Planning, Tokyo Univ., Dr.Eng

This study shows one of the methods how to grasp “seikatsu-kei(living landscape)” in terms of townscape planning. This is also based on the method to “read” the context of urban space, which was mainly practiced in 1980’s. After arguing our way of thinking about “seikatsu-kei”, we show importance of recognizing spatial history and structure to understand the meaning of urban environment. Then we introduce an experiment carried out in 4 neighborhoods around the Hongo campus. This experiment is consist of 2 steps. The first is research of spatial structure. The second is experience of urban space by walking based on viewpoints of the first step. Finally potential and universality of this method for general urban space is presented.

景観の意味, 空間の履歴, 空間構造, 文脈, まち歩き
meaning of townscape, spatial history, spatial structure, context, town walking

1. はじめに

「生活景」とはこれまでに様々な解釈の中で扱われてきた概念であるが、大まかに捉えるならば、日常的な生活環境の景観であり、その対象は広範囲に及ぶがゆえに、それを捉える視点を如何に設定するかが、まちづくりの鍵を握ると言えよう。

北原(2000a)¹⁾によれば、人々が景観という観点から自己をどのように定位するかということが「生活景」を捉える上で重要であり、地域住民の積極的参加による景観づくりが叫ばれている昨今、こうした「景」を人々にどのように「観」せるのかという視点が求められる。そこで本稿では、このような「景」の背後にある空間構造を読み解き、それらをまち歩きを通して体験することで、「生活景」を認識するための方法論を、東京大学本郷キャンパス周辺の事例から検討し、このようなまち歩きがまちづくりにおいて果たしうる可能性について考察する。

2. 「生活景」概念の動向

北原(2000b)²⁾は、『「生活景」をめぐる論点と研究動向』として、1975年から1993年に至る「生活景」に関する研究の整理を試みている。これを見ると、住環境の景観が「生活景」というキーワードで捉え直されていることが分かる。

また前掲の2000年に行われた研究協議会資料を見ると、各研究者は「生活景」という言葉が投げかけられてはじめて自分の研究活動の中から「生活景」を見つめなおすという状況が起きているのを見て取れる³⁾。こ

れは「生活景」とは、そのような言葉・概念の提示があつて、はじめてそこに気がつき、実は自分の身の回りの都市空間を「生活景」として捉え直すことができるようになるという概念の本質的側面を示唆するものと言えよう。

では、このように我々にも投げかけられた「生活景」とは一体何であるか。ここで我々の研究テーマとすり合わせるために、ここで整理したい。

まず、「生活景」は日常的な環境を「景観」として捉えた瞬間に立ち現れるといえるだろう。そして、その瞬間の心的現象を「生活景」と呼ぶのである。つまり、「生活景」は認識されないうちは存在していないに等しいと言えるだろう。では、日常的な環境を景観として捉えるといったときの「景観」とは何であるか。中村良夫の言葉⁴⁾を借りると、景観とは「人間をとりまく環境のながめ」である。そもそも中村は当初から「生活景」を想定して、景観を定義していたと言える。

しかし、日常的な生活環境は見方を提示しないことには景観として立ち現れてこない。そこで「生活景」をどのようにして読み解き、その見方を提示するかということが重要であると言える。

3. 「生活景」の読み解き

例えば歴史的な町並みは、環境の見方を提示せずともその価値を端的に理解することが容易であるが、わが国の既成市街地でこのような歴史的な町並みを有する既成市街地は一握りである。しかし、その一方で城下町や門

前町など近世の町割りを継承しつつ発展した市街地もまた少なくない。このような市街地は一見すると建物が更新され、雑然とした印象を受けるが、そこには歴史的な文脈から見る都市空間の構造、ないしは景観の構造を通して読み解くことが可能である。

このような日本の現代の都市空間の読み解くための方法論に関しては、1980年代を中心に盛んに取り上げられてきた。例えば横ら(1980)⁴⁾は、都市形態の背後にある、文化的なコンテキストの中で、その意味を認識することの重要性を示し、陣内(1985)⁵⁾は、江戸の上に積層する現代の東京の都市構造を読み解く視点を鮮やかに描き出した。

これらの現況の都市空間を「読み解く」視点は当時の都市論ブームの中で大いに取り上げられ、都市に対する認識を大きく変えたと言える。

既成市街地の景観形成の手がかりが従来以上に求められる今日、これらの都市論が示す視点を、今日的な文脈の下で捉え直すことは、大きな意味を持つと考える。

また重要な視点として、前述した陣内は、地形とその上に歴史的に成立した空間構造のあり方は、実際に体感することで認識することができるものであり、「まち歩き」が「都市空間を読む」上で最も有効な方法であることに言及している⁶⁾。これは、都市空間を読むことによって風景の「見方」が変わることを示唆するものと言える。

4. 本郷における試み

東京大学都市デザイン研究室では、2005年11月に東京大学都市工学科で行われたオギュスタン・ベルク氏による特別講義⁷⁾に際して、本郷キャンパス周辺の4つの境界(真砂町・菊坂町、森川町・台町、西片町、東片町・追分町)の都市空間を読み解く作業を行い、そこから導かれた視点を下に、ベルク氏を交えたまち歩きを実施した。

これらの一連の試み(以下、「本郷プロジェクト」)の要点は以下の通りである。

1. (本郷キャンパスを主要な生活の場とする)我々にとって日常的な環境である本郷地区を対象とすること
2. 都市の空間(及びその可視的表象としての景観)の背後にある、空間形成の計画的、あるいは状況に対応するための意図を読み取り、環境の成立した文脈を明らかにすること
3. 上述した文脈を整理した上で、境界の特性、領域的なアイデンティティをかたち作る空間の構造を抽出すること

4. 抽出した「空間の構造」を、実際の都市空間を移動する中で体験すること

このような観点から、「本郷プロジェクト」の具体的なプロセスは、大きく2段階に分けることができる。

<1. 都市空間の読み解き>

①空間の履歴の把握

- ・対象地区の基層を成す江戸期の土地利用、及び明治から現代に至るまでの土地利用の変化、震災及び戦災の影響等
- ・街路の形成年代
- ・境界を特徴づける主要な施設(寺社、学校、公共施設、旅館等)の立地や街路拡幅、水路の埋め立て等、空間形成に関する年表の整理

②境界毎の空間構造の抽出

- ・境界毎の空間の履歴の把握と、現況空間における履歴の痕跡(街路の幅員や接合空間の形態、敷地規模・形態、水路の跡、樹木、歴史的建造物等)の調査
- ・都市計画(用途地域、容積率、都市計画道路等)の現況
- ・街路構造や敷地形態、地形条件、空間形成史等から、地区の空間的(領域的)な「まとまり」
- ・上述した「まとまり」を体現する空間構造(街路・地形条件・敷地形態)

③資料集の作成

- ・4つの境界の空間の見方を整理し、まち歩きを行う際の空間認識の手引きとなる資料集を作成

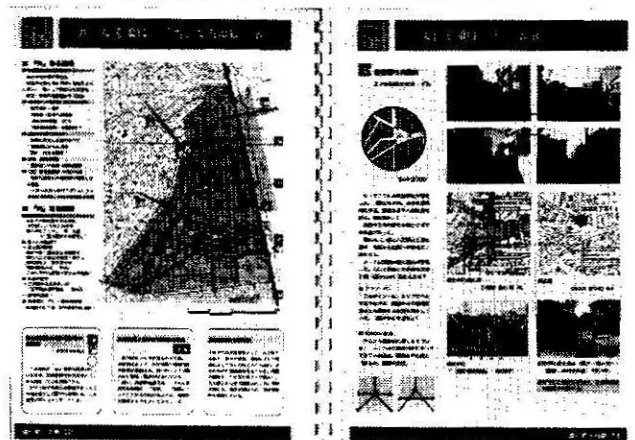


図1: 作成した資料集

<2. まち歩き(移動を伴う空間体験)>

①ルートの設定

- ・「都市空間の読み解き」において整理した空間の履歴と空間の構造、即ち、環境の文脈を体験する上で重要な地点・道を抽出し、それらに関係づける上で適当なルートを設定

②まち歩きと景観体験

- ・まち歩きの手引きとして作成した冊子及び重要な地点での解説に用いるパネルを携え、まち歩きを実施

5. 「本郷プロジェクト」が示す生活景の見方

現在の都市空間の成立要因を読み解き、各境界の空間構造を明確にすることで、普段何気なく見る風景の「意味」を認識することができる。

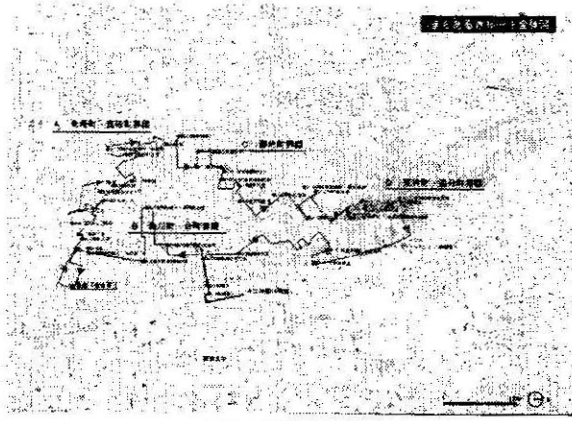


図2：界隈ルート図

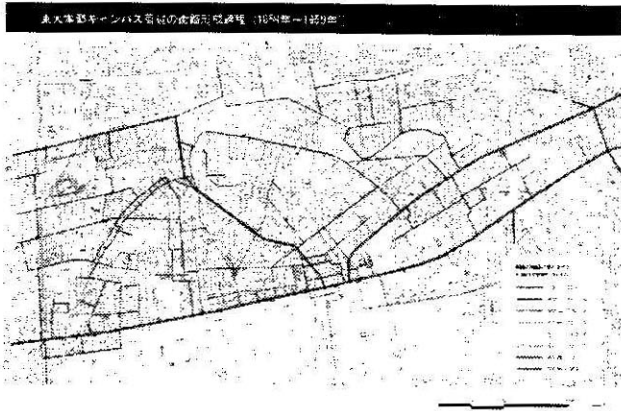


図3：街路変遷図

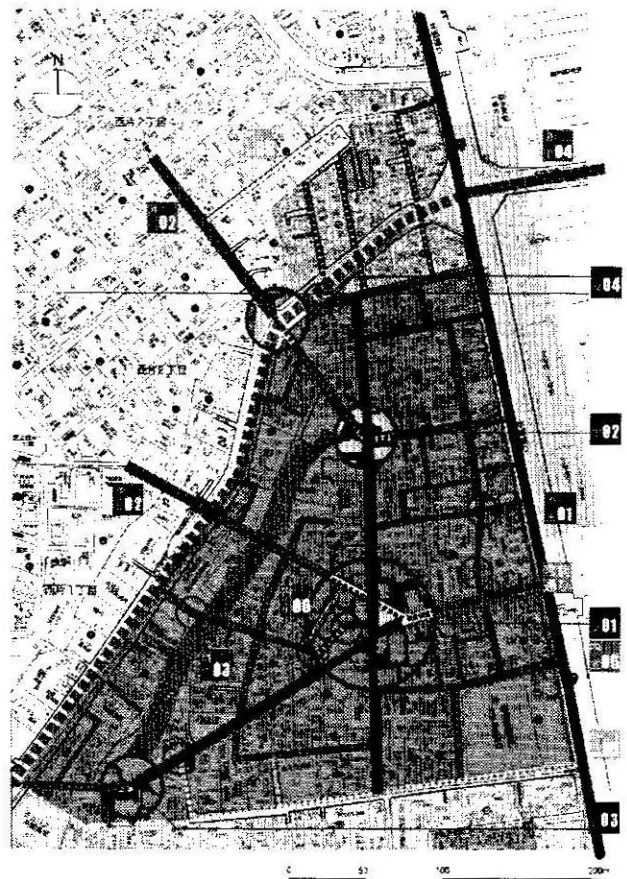


図4：森川町の構造

表1：界隈の概要

地域名	茶板町・森川町界隈		森川町・台町界隈	
地域の特徴	<p>地形の力、広さの形</p> <p>地形：茶板町は、山麓に位置し、森川町は、谷間に位置する。地形の違いにより、茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。また、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。</p>		<p>見え隠れする「界隈」</p> <p>茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。また、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。</p>	
まちあるきのテーマ	<p>地形の力</p> <p>茶板町は、山麓に位置し、森川町は、谷間に位置する。地形の違いにより、茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。また、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。</p>		<p>見え隠れする「界隈」</p> <p>茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。また、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。</p>	
歴史	<p>昔懐かしい</p> <p>茶板町は、山麓に位置し、森川町は、谷間に位置する。地形の違いにより、茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。また、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。</p>		<p>見え隠れする「界隈」</p> <p>茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。また、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。</p>	
現代（再開発・まちづくり）	<p>茶板町</p> <p>茶板町は、山麓に位置し、森川町は、谷間に位置する。地形の違いにより、茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。また、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。</p>		<p>森川町</p> <p>森川町は、谷間に位置し、茶板町は、山麓に位置する。地形の違いにより、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。また、茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。</p>	
現代（再開発・まちづくり）	<p>茶板町</p> <p>茶板町は、山麓に位置し、森川町は、谷間に位置する。地形の違いにより、茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。また、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。</p>		<p>森川町</p> <p>森川町は、谷間に位置し、茶板町は、山麓に位置する。地形の違いにより、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。また、茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。</p>	
現代（再開発・まちづくり）	<p>茶板町</p> <p>茶板町は、山麓に位置し、森川町は、谷間に位置する。地形の違いにより、茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。また、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。</p>		<p>森川町</p> <p>森川町は、谷間に位置し、茶板町は、山麓に位置する。地形の違いにより、森川町は、茶板町よりも、より狭い地形に恵まれている。また、茶板町は、森川町よりも、より平坦な地形に恵まれている。</p>	

例えば、写真1は森川町の中心に位置する広場的な辻の風景である。森川町はもと岡崎藩本多家の下屋敷であり、明治以降の宅地分割の過程で、旧屋敷内にあった映世神社が、森川町の街路形成の焦点となった。一見不思議な形をしたこの空間には、戦後直後まで映世神社の鳥居が存在し、商店が建ち並ぶ背後の敷地が境内であった。このように認識すると、街路や敷地・建物の形態が、都市形成的な意味を持った風景として立ち現れてくる。

また写真2は、菊坂から台町へ至る街路の風景である。この街路は一直線ではなく、所々に軸線方向に数メートルの「ずれ」が見られ、その前後で幅員が微妙に異なっている。空間の履歴を辿ると、付近は明治43年まで本妙寺の境内であったが、寺の移転後、当初参道であったみちが宅地化に伴って漸進的に延伸されてきた。街路の「ずれ」は、これまでの宅地化の時期の違いの痕跡として立ち現れる。

本郷プロジェクトの2段階目の「まち歩き」において、参加者はこのような空間の成り立ちに関する説明を受け、街路を移動しながら、境界の空間構造を体感し、風景に対する認識を新たにすることとなる。

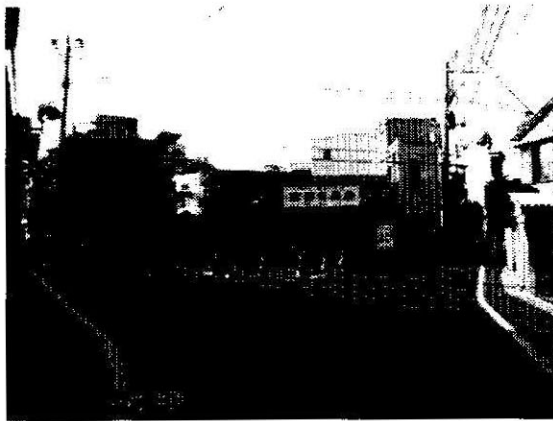


写真1：旧映世広場



写真2：旧本妙寺境内

6. まとめと今後の展望

本稿では今後まちづくりを展開していく上で、「生活景」を読み解くためのひとつの方法論を示した。即ち

1) 「生活景」の読み解く上での、都市空間の履歴から空間構造の把握、2) 読み解いた空間構造を認識する上での「まち歩き」の実施、である。

さらにこれらの読み解きによって得られた知見を、今後の景観計画策定等のプロセスの中に積極的に位置づけることは有効であろう*。

また今回は実施していないが、地域住民を対象に、このような「生活景」の見方を提示する「まち歩き」を実施することも、大きな意味を持つと考えられる。本来、まちづくりに関わる外部の専門家と地域住民では、その空間に対して、それぞれが異質な別の情報や認識を持っている。このような主体間でまち歩きにおける空間経験の共有、お互いのコミュニケーションの過程で情報の共有化を図ることは、本来、地域住民の認識のありように依拠する「生活景」を補完する上で、重要なプロセスとして位置づけられよう。このような観点から、地域住民との視点・認識の交流としての「まち歩き」を実際に行い、その有用性を検証していくことも課題と言える。

また本稿では事例として江戸の都市構造を少なからず継承する東京都心部を取り上げているが、ここで取り上げた方法論は、歴史的基盤を有する都市のみならず、一般の既成市街地に適用することも可能である。例えば、近代以降に区画整理事業を行った既成市街地や、戦後に造成されたニュータウン等においても、何らかの計画的意図が存在する。こうした地域においても、環境の文脈の把握から「生活景」を読み解くことは有用であろう。

注

注1 小島(2000)⁶⁾では、冒頭において「不勉強な私は、「生活景」という言葉・概念を今までほとんど使ったことがありませんでした。しかし今回、「生活景」というテーマを与えられてみると、近年私が実践しつつ考えてきたこと、特に「芦屋西部地区復興まちづくり」の中で考えてきたことが、ごく自然にこの言葉に引き寄せられ、明快になってきたように感じられます。」と、ふなり素直に告白している。

注2 前掲神内(1985)p23

注3 特別講義の内容に関しては「季刊まちづくり」10号 pp.93-97 (2006)を参照

参考文献

- 1) 北原理雄「まちづくりのシナリオ・メイキング 『生活景』からの地域環境づくり(建築学会都市計画・農村計画部門 研究協議会) 建築雑誌 vol.115 No. 1457 7月号 p.65 (2000)
- 2) 北原理雄「『生活景』をめぐる論点と研究動向」建築学会都市計画・農村計画部門 研究協議会資料 pp.1-4 (2000)
- 3) 中村良夫ほか『土木工学大系13 景観論』朝国社(1977)
- 4) 横文彦ほか『見えがくれする都市』鹿島出版会(1980)
- 5) 神内秀信『東京の空間人類学』筑摩書房(1985)
- 6) 小島次「『生活景』とまちづくり、土地区画整理事業」建築学会都市計画・農村計画部門 研究協議会資料 pp.67-72 (2000)